

プロセブン

2

恩人の言葉

家具に貼りつけて、地震による転倒を防ぐ耐震グッズ。プロセブン社長の小玉誠三はホームセンターや金物屋を探し回ったが、そんな商品はどこにもなかった。徒労感にむしばまれる小玉。あきらめかけた小玉

の頭に浮かぶのは自分を見据える友人の遺児の瞳、そして「けして子供にうそをつくなよ」という、恩人であるソニー創業者・井深大の言葉だった。

井深との出会いは1977年。化粧品会社の営業マンだった小玉を、井深が引き抜こうとしたのがきっかけだ。「他社の人間に会社を辞めるとは、なんて失礼な人だ」と思い一度は固持した小玉だが、井深の人間性に魅力を感じたこともあり、最終的には転職を決意



失意の底で「ひらめき」

耐震マット開発秘話



現在の耐震マット

した。小玉は井深について「まねが出来ないほど奥深い人だが口も悪かった。『おまえはバカだ』とどれだけ言

われたか分からない」と評する。その後小玉は、82年に実家の呉服屋を継ぐためソニーを退職。5年と短かったが、苛烈なカリスマ経

営者である井深の薫陶は、経営者・小玉を作る上で大きな影響を与えた。

その井深の教えが小玉の心に火を付けた。97年、小玉はたった一人でマットを想定した耐震グッズ開発をスタート。全国の化学工場を訪ねたが、小玉が素人だったこともあり、ほとんど

の会社から冷たくあしらわれた。

運良く大阪で協力会社が、見つけたりスタートしたが、その会社の社長によると「無理難題だと思っただが、小玉社長の熱意に押され」というのが実情のよう

脳裏に電撃

小玉の脳裏に電撃が走る。「液体のように、マットの分子を小さくすれば粘着力の高いマットが出来るに違いない」。小玉は慌てて店を飛び出すと協力会社に電話し、急いでアイデアを伝えた。これをきっかけに、00年に耐震マットが完成。震度7に耐える耐震マット「プロセブン」が生まれた。

全てを失う

「全て失った。一体俺は何をしているのか」。落ち込む小玉。目の前にコップ

(敬称略)